キーワード　伝統的な景観、ゆらてぃく、ゆいまーるの心

白保村ゆらてぃく憲章推進委員会

ミッション
白保村ゆらてぃく憲章推進委員会は、
「海と緑と心をはぐくむ、
おおらかな白保」を目標とする
白保村ゆらてぃく憲章に定めた
村づくり七箇条の実践活動を
支援するとともに、
地域社会の重要課題の解決に向けた
事業を立案し、
率先して行動することを目的として
設立されました。

設立年月　2007年2月
メンバー数　20名
代表者名　多宇 元（たう はじめ）

沖縄県石垣市字白保118
WWFサンゴ礁保護研究センター・
しらほサンゴ村内
白保村ゆらてぃく憲章推進委員会

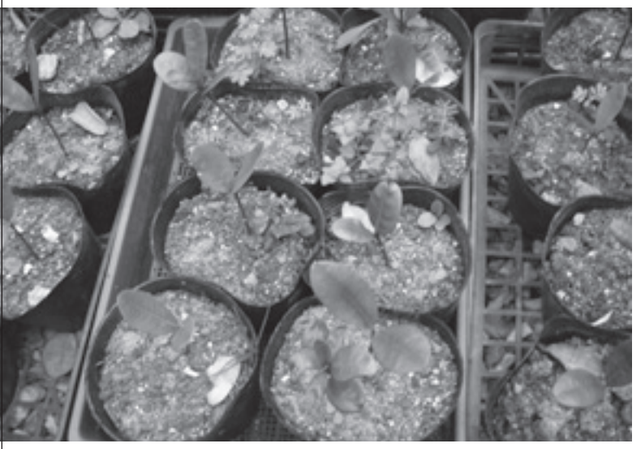
連絡先
上村 真仁（かみむら まさひと）
TEL 0980-84-4135
kamimura@wwf.or.jp

下：修復後の石垣

◎私たちが行ったこと

私たちの暮らす白保集落は、沖縄本島より南西におよそ450km、八重山諸島の主島である石垣島の南東部、広く太平洋を臨む場所に位置しています。市街地より12km離れた国道沿いに約1,600人、500戸あまりの集落を形成する昔ながらの農村集落で、今もなお農業・畜産業の盛んな村です。目の前に広がる海は、世界最大級のアオサンゴ群落を有するサンゴ礁で有名ですが、芸能活動の活発な村としても知られ、豊年祭やハーリー祭、種子取祭などの伝統行事を大切に受け継ぐとともに、石垣、福木、赤瓦などの伝統的な集落景観を多くとどめる集落でもあります。

左：福木の苗　右：福木と石垣



その歴史は古く慶長検地（1610年）にさかのぼります。1771年（明和8年）の大津波で、大きな被害を受けました。その後、波照間島や沖縄本島、宮古島、多良間島などからの移住者を迎え、ともに村を支え現在に至っています。

1979年に発表された新石垣空港建設計画では、「賛成」「反対」で村を二分する悲しい時代もありました。しかし、1995年には一つにまとまり、村の団結に向けて公民館活動が進められています。

ここ数年は、他県からの移住者（主に団塊の世代の退職者や若者層等）が増加しています。また、新石垣空港の着工（2013年3月供用開始予定）により、白保集落にも大きな変化の波が押し寄せようとしています。大規模な開発や新住民の急増は、地域に新たな活力をもたらす反面、景観の変化や伝統文化継承の困難化、地縁・血縁の絆を重んじるコミュニティ団結力の希薄化などが心配されます。楽園のようなイメージが流布されていることもあり、移住者が増加する一方で数年で島を去る人が多いのも実情です。

村の良さを守るとともに、村の資源を活かした地域活性化の必要性の高まりを受けて、白保公民館では、2004年より全住民の参加と合意による村のビジョンづくりに着手しました。全住民へのアンケート調査を実施し、幼稚園、小学校、中学校の子どもたちによる作文や図画によって白保の大好きなところを把握しました。それに加えて子どもたちや地域の古老と地域の魅力を掘り起こした、「ゆらてぃく地図」づくりなどを行った結果、2006年白保公民館総会において、村づくりの目標と方針、具体的な施策をとりまとめた「白保村ゆらてぃく憲章」を制定するに至りました。

また、この憲章を単なる絵に描いた餅に終わらせず、具体的に村づくりを促進させるために、2007年2月に、白保村ゆらてぃく憲章推進委員会を設置し、各種の村づくりの支援を行っています。

急速に失われつつある伝統的な集落景観を維持・修復することは、白保の村づくりにおいて重要な課題でした。アンケート調査においても多くの村人の関心事であり、憲章の村づくり七箇条の一つに“石垣、赤瓦、福木を愛し、きれいな街並みをつくります”が掲げられています。

しかしその反面、多くの村人が石垣をブロック塀に変えることや、落葉や落果の片づけが面倒な福木の防風林を伐採することは、時代の流れの中で仕方の無いことであり、他人の財産について口出しすることは難しいと考えていました。

伝統的な景観を守りたいと思いながらも諦めてしまっている状況を何とかしなければ、憲章に掲げた村づくりの実現も困難であると考え企画したのが今回の『“ゆいまーる”による伝統的な街並み景観の修復事業』でした。

実際に修景活動を行い、集落景観が良好に変化することを村の皆さんに実感してもらうことで街並み保全、創造への賛同、協力を進めていこうというものです。具体的には、神事などの際に利用され

ゆらてぃくとは
白保村を代表する民謡“白保節”を最も印象づける歌詞で、白保人気質（さぶぴぃとぅかたぎ：勤勉、寛容、友好、文化的感性、団結、友情）を表す言葉でもあることから、村人が団結し取り組むべき「きまり－憲章－」の冠として位置づけた。

白保村ゆらてぃく憲章
与那岡から見渡す田園風景、魚湧く海、赤瓦、福木、石垣の残る集落
その中で受け継がれる伝統芸能、白保村の先輩たちが守り伝えてきた豊かな自然とともにある暮らしを守り、若者たちが夢と誇りを持って次世代を担うことのできる、海と緑と心をはぐくむ、おおらかな白保を目標としたゆらてぃく白保村づくりを推進します。

白保村ゆらてぃく憲章 村づくり七箇条
一、白保の文化を守り、未来につなげます。
一、世界一のサンゴ礁を守り、自然に根ざした暮らしを営みます。
一、石垣、赤瓦、福木を愛し、きれいな街並みをつくります。
一、恵まれた自然を活かし、村を支える地場産業を育成します。
一、地域の教育力を高め、次世代を担うたくましい子どもを育てます。
一、スポーツや健康づくりに励み、心と体の健やかな長寿の村をつくります。
一、ゆらてぃくの心で団結し、平和で、安全な世界に誇れる白保村をつくります。

るカンヌミチ（神の道）とンマガミチ（馬が道）と呼ばれる白保集落の中心的な２つの通りを対象として、石垣、福木の街並みと調和した修景を行いました。

作業は、広く集落内にボランティア参加を呼びかけ、多くの新規住民の皆さんにも参加していただき、ともに活動することで実施しました。石積みの崩れた場所の修復、ブロック塀には、つる性植物での緑化を行いました。また、福木の苗を育て、街路沿いの屋敷内に植樹することで、伝統的な街並みとの調和を図りました。

取り組み例：金嶺邸

手順１　既存のブロック塀の撤去（家主の費用負担で実施）
手順２　石の調達　畑などからの小さな石の掘り起こしと収集
　　牧場や建築現場からの石材を譲り受ける
手順３　門の位置決めなど　石工棟梁による風水などによる位置決め
手順４　石の運搬　重機、トラックによる作業現場までの搬送
手順５　ボランティアの呼び掛け
手順６　作業当日　朝８時半集合　石工棟梁の指導による石積み
手順７　昼食　家主による昔ながらの炊き出し
手順８　午後の作業　夕方６時頃終了
手順９　ブガリノーシ（慰労会）
手順10　棟梁、専門の石工による門づくり
手順11　植樹

ゆいまーる精神に感激！！
石積みをした人の声

石垣の修復の一日｜新城邸

石積み前

朝８時
大泊一夫さんからの説明

大きな石を
基礎として並べて行く

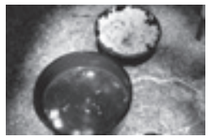
子どもたちも
協力してくれました

大きな石の間に
小さな石を入れます

午前中でここまで完成

上：修復前｜新城邸
下：修復後

木陰で昼食


新城トシさん、
とも子さんの
アーサー汁と
ジューシーメを頂く

どんどん積み上げていきます

子どもたちも
楽しみながら石運び

最後の仕上げです

夜７時　完成

私たちが大切にしていること
白保の聖地とされる与那岡（ユナムリィ）からの眺めは、
緑濃い田園の広がりと魚湧く海と呼ばれるサンゴ礁の輝きを一望にできるそれは美しい風景です。
集落内にはかつての“ゆいまーる”で建てられた赤瓦の家屋や、福木の防風林、
サンゴの石垣を備えた伝統的な屋敷が数多く残り、昔ながらの街並みをとどめています。
こうした自然とともにある先人の営みは、村人がともに集い、
村を挙げて執り行う多彩な祭事、神事や芸能を育んできました。
これら白保村の先輩が守り、私たちに残してくれた島の暮らしは、
私たちの大切な宝物といえます。かけがえのない“村の宝”を守るとともに、
活かすことで地域の魅力を高め、若者たちが夢と誇りを持って担うことの出来る村づくりを進めています。

◎私たちが伝えたかったこと

活動の主な目的は、伝統的な街並みの修景ですが、憲章に基づく村づくりを進めていくために次の３つのことを集落内外の皆さんにお伝えしたいと考えて実施しました。

実践活動の大切さ
あきらめるのではなく、実際に活動してみることが、大きな目に見える成果を生み出すことにつながるということ。

ゆいまーるの心
一人ひとりの力は小さいけれど、皆が協力することで地域を変える大きな力になること。

地域に対する責任
村づくりの主役はそこに暮らす住民一人ひとりであり、行政や企業へ依存するのではなく、自分たちの手で取り組む大切さ。地域の資源を守り、活かす権利と責任も地域住民にあるということ。

◎エピソード

サプライズ
当初、ブロック塀については、ピパーツでの緑化を行うことを想定していましたが、カンヌミチ、ンマガミチ沿いの皆さんに呼び掛けたところ、ブロック塀を撤去して石積みをしたいという申し出が複数ありました。ブロック塀の撤去費用は、全て家主が負担することという条件であったにもかかわらず石積みをしたいという要望があり、2008 年度は、5 軒でブロック塀を撤去し、石積みを行いました。（ブロック塀の撤去費用額は、ブロックの状態にもよりますが、一軒あたり 15,000 円～ 30,000 円程度かかり、その他、立ち枯れた福木の根の撤去費用とし別途 30,000 円程度かかった家もあります。）また、石積みに用いる石（サンゴ石灰岩）は、購入することを想定していましたが、集落の多くの皆さんから石の無償提供を受けることができました。
　このように、多くの地域の皆さんが伝統的な景観に誇りと愛着を持っていたということがわかり、心強く、活動を実施してよかったと思いました。

変更点
予算執行面で、会議費等の支出がほとんどありませんでした。これも伝統的な“ゆいまーる”に習い、炊き出しや終了後のブガリノーシ（慰労会）などは全て各家主から提供いただいたためです。

その他
石工の棟梁である大泊一夫さん（78 歳）をはじめとする年配の皆さんから昔のゆいまーる作業の思い出を聞くことは、白保の人々のかつての暮らしやつながりを学ぶ上でも貴重な機会となりました。また、昔ながらの自然の素材を活用する技術や知恵を持つ年配の方々の活躍の場が出来たことで、そうした方々の郷土愛と誇りを形にして受け継ぐことが出来たことも大きな成果だと思います。

◎私たちの“これから”

今回の活動により目に見えて景観が変化しました。また、時代の流れとしてあきらめていた伝統的な景観に対する地域の皆さんの再評価が進み、今後の賛同者、協力者が増えることが期待されます。2009年度も引き続き修景事業を進めることで、集落周辺の農地や海浜への眺望を含む景観保全につなげて行きたいと考えています。

活動の成果は、憲章に位置づけられた他の村づくりを進める上でもとても重要な意味を持つと考えています。今後、伝統文化や自然環境と調和の取れた真に豊かな白保集落を目指して、村人が団結して憲章に基づく村づくりに取り組んで行きたいと思います。

◎私たち自身で活動を評価

2008年度は延べ200人以上の皆さんに参加してもらうことが出来ました。また、8軒の家で石積みが行われ（内5軒がブロック塀を撤去し、石積みを行いました）、4軒で福木の剪定が行われ、福木の苗100本、ピパーツ（長胡椒：自生するコショウでは国内で唯一）の苗200本の植樹が行われました。こうした取り組みにより、目に見えて集落景観に変化が現れています。

この活動を始めるにあたって、どれだけの人に参加して貰えるのかが大きな不安でした。“ゆいまーるの心”とは、ボランティアそのものであり、賛同する人の数が読めなかったからです。学校の美化清掃や子どもたちのクラブ活動の資金造成時などに、労働提供は頻繁に行われています。しかし、昔ながらの村人の共同作業という意味での“ゆいまーる”は、年に数度の豊年祭などの祭りにわずかに残るだけで、ほとんど行われていないのが実情です。

取り組みの初期は、憲章推進委員を中心に石集め作業を進めることとなりました。しかし、実際に石積みを始める段階になると、憲章だよりでの周知や推進委員の呼びかけ等が功を奏し、多くの参加を集めることが出来ました。

こんなに嬉しいことは
人生で初めて！
参加者＿石積みをした家の主の声

下：改修されたンマガミチ（馬の道）

３つのこだわり
白保らしさ：歴史・地域に学び、白保の特質にこだわった個性ある村づくり
ゆいまーる：相互扶助、地域コミュニティの団結・協働による村づくり
持続可能性：文化、自然、産業の調和のとれた島の暮らしを受け継ぐ村づくり

おじぃの生きているうちに石積みが出来てよかった。ありがとう。

参加者＿石積み参加者の声

作業の呼び掛けに対して同級生や親戚、かつての“ゆいまーる”のお返しのために参加する人など、人と人とのつながりの温かさを強く感じることが出来ました。また、ボランティアの呼び掛けに対して、多くの新規住民の方々も参加していただき、これまで接点のなかった集落内の人のつながりが生まれました。小中学生を家族にもつ新規住民は、PTA活動の中で旧住民との交流機会は豊富にありますが、それ以外の人々にはあまり交流の機会がありません。新・旧住民問わず村の伝統的な街並みを愛する人たちが、ともに汗を流し作業を通じて連帯感を育んだことは、大きな成果といえるのではないでしょうか。

また、石積み作業は、重労働で技術を要する難しい作業ですが、回を重ねるごとにコツをつかみ作業がスムーズに進むようになったことも伝統的な技術の継承の証だと感じています。

参加者の皆さんには、自分たちの村を自分たちの手で、活動で、変えていくことができるという実感、達成感を味わっていただくことが出来ました。また、人と人との繋がりが生まれ、コミュニティの団結力を高めることが出来たと考えています。本事業が円滑に進んだことで、白保村ゆらてぃく憲章への理解が深まり、村づくりへの賛同者と協力者が増えています。

特別助成